

「物語」としての陰謀論——アーレント思想から見るポスト真実

百木 漠（関西大学法学部准教授）

1. 陰謀論をめぐって

ジョナサン・ゴットシャル『ストーリーが世界を滅ぼす』（2021）

・陰謀論（conspiracy theory）という言葉は、まずその名称が間違っている。われわれはこれを**陰謀物語（conspiracy story）**と呼ぶべきだ（121頁）。陰謀物語が流行るのは、大抵それが気持ちをワクワクさせる虚構のスリラーだから。それに対して、その嘘を暴く記事は、そのような「物語が存在しない」という興ざめな仕事をしなければならない。「本書が取り上げるのは物語のパラドックスである。物語は古くから人類にとって恵みであり、災いでもあった。物語は私たちの病であり、癒しでもある。破滅も救済も物語もたらす」（28頁）

「私たちが狂わせ残酷にしているのはソーシャルメディアではなく、ソーシャルメディアが拡散する物語である。私たちが分断するのは政治ではなく、政治家たちが楔を打ち込むように語る物語だ」（29頁）

⇒今日、政治的に大きな影響力を及ぼすようになっている陰謀論は、現代人の欲望を満たす一種の「物語」として機能しているのではないか。

◆陰謀論の流行（とりわけアメリカで深刻な政治的影響を与えている）

- ・共和党支持者と共和党寄り無党派層の63%が、「2020年の大統領選でバイデンは正当に勝利しなかった」と回答（有権者全体では35%程度とされる）。
- ・共和党支持者の3分の1が、Qアノンの陰謀論（アメリカの政財界やメディアは「ディープ・ステート（闇の政府）」に牛耳られている・世界は悪魔を崇拝する小児性愛者によって支配されている・トランプはそれら悪の勢力と闘う正義の味方）を信じている。
- ・アメリカ人の半数が何がしかの形の911陰謀論とケネディ暗殺陰謀論を信じている。etc

※アメリカ合衆国議会議事堂襲撃事件

・2021年1月26日にトランプ支持者が「2020年の大統領選挙で選挙不正があった」と訴えて、アメリカ合衆国議会議事堂を襲撃。5名が死亡。トランプ大統領がこの襲撃を扇動したとして弾劾裁判に問われるが無罪に。これまで千名以上が訴追された。

→もはや陰謀論は笑って済ませられるものではなく、アメリカ政治に無視できない影響を及ぼすようになっている。米国大統領選挙にも無視できない影響を及ぼしている。

秦正樹『陰謀論——民主主義を揺るがすメカニズム』（中公新書、2022年）

- ・日本人でも3~5人に1人（全体の2~3割）が何らかの陰謀論的信念を有している。これは右派（保守）だけでなく左派（リベラル）にも当てはまる。
- ・「現実が、彼らが想定する「あるべき現実」とあまりに乖離していることへの不満があ

り」(25頁)、陰謀論はその乖離を埋めるための手段・不満解消法として機能している側面がある。「現実とは異なる「あるべき現実」を強く信じている人ほど、このギャップにより苦しめられることになる」(26頁)。

- ・海外の研究では、ナルシシズム（自己の評価を誇張したがる傾向）が高い人や、社会的に疎外されていると感じる人ほど陰謀論を信じやすい傾向にあることが報告されている。
- ・「見たくない／受け入れたくない事実」がある際に、人々がその現実から逃避するためのツールとして陰謀論が機能する。これは左右の立場を問わない(39頁)。

◆仮説

- ・アメリカで陰謀論が流行し、政治的影響力を増しているのは、アメリカで愚かな人々が増えているからではなく、アメリカ社会・政治の現状のあり方に強い不満を持つ人々が増加しているがゆえではないか。そのことが「別の世界のあり方」を希求する態度に繋がっており、ポスト・トゥルースや陰謀論を増殖させているのではないか。

◆陰謀論をめぐる研究状況

- ・過去20年の間に、陰謀論に関する研究分野が急成長した。陰謀論研究は現在、主流のトピックとみなされている。(Routledge Handbook of Conspiracy Theories, 2020)
- ・一昔前まで、陰謀論は非合理的で危険な現実の理解、時代遅れの宗教的世界観に近いもの(ポッパー)、あるいは偏執狂的な心の欠陥を持つ者が抱く妄想(ホッフスタッター)などと捉えられてきた。しかし近年ますます多くの人々が陰謀論を信じるようになるにつれ、こうした理解は古いものとなってきている。
- ・とりわけ2000年代以降、人類学やカルチュラル・スタディーズなどの分野で、陰謀論を頭のおかしい人々が抱く妄想と見るのではなく、これは複雑化した情報過多な現代社会に対する^{レスポンス}反応として捉えるアプローチが増加している。こうした学者たちは陰謀論を、目まぐるしく変化する不透明な現代社会に対する「必要な」「創造的な」「論理的な」「妥当な」「戦略的な」「生産的な」反応とみなしている(Harambam/Kamile/Lars 2020)。
- ・陰謀論は「不確実な時代に奇妙な安らぎを与えてくれる」(Melley 2000, 8)、「しばしば難解で複雑な問題に対して、日常的な認識論的応急処置を提供する」(Knight 2000, 8)。

◆現実社会への不満や不安を埋め合わせるものとしての陰謀論

- ・「陰謀論は敗者のためのものだ」(ユージンスキ 2022, 150頁)
- ・ハリー・G・ウェストとトッド・サンダースによれば、「透明性が叫ばれる中、多くの人々が何かが言われている通りにはなっていないという感覚を持っている。陰謀論は... 今日では、さまざまな形で目に見える、現代文化の一般的で常態化された日常的な世界理解の方法となっている」(Harry/Todd 2003)
- ・ジャロン・ハランバムは陰謀論を抱く人々に対する質的調査を行い、陰謀論を規範的に

退けることなく、世界の多様な捉え方の一種として見る（陰謀論への非規範的アプローチ）。現代をポスト真実の時代と捉えるよりも、**多元的な真実（poly-truth）の時代**と捉えることを提唱（Harambam/Kamile/Lars 2020）。ポスト真実とは「真実の終わり」ではなく、むしろ「真実をめぐる熾烈な大衆の争い」を指す。陰謀論をもつ人々にも公的な場での発言を与える方が良い。そうした人々も含めて議論することが、陰謀論を抱く人々の不安や不満を和らげることにも繋がる。

- ・陰謀論の流行の背景にあるのは、エリートが提示する「公式の真実」に対する根深い疑念である。ハランバムはこれを「**不信のハビトゥス**」と呼ぶ。

2. ポスト・トゥルースをめぐる

- ・オックスフォード大学出版局が2016年の「ワード・オブ・ザ・イヤー」に「**ポスト・トゥルース**」を選んだ。意味は「世論の形成において、客観的な事実よりも、感情 emotion や個人的信条 personal belief へのアピールの方がより影響力をもつ状況」
→2016年の米国大統領選でのトランプの勝利、英国の国民投票でのEU離脱（Brexit）などを受けて。トランプやファラージは選挙期間中に事実を反する主張や差別的言説を繰り返していた。2024年トランプが大統領選で再び咲き、再び注目が集まる。

◆拙著『嘘と政治——ポスト真実とアーレントの思想』（青土社、2021年）

※ポスト真実は、たんに腐敗した政治家が嘘をまき散らすという現象ではない。多くの支持者は、政治家が事実とは異なる発言をしていること（少なくとも問題含みであること）を知っている（d'Ancona 2018, p.29）。そのうえで、その政治家を支持し続ける、という態度を取っている。このアイロニカルな態度がポスト真実を特徴づけている。つまり、ポスト真実の本質は、虚偽の発信者よりもむしろ受け取り手の方にある。

「ポストトゥルースとは真実が存在しないという主張ではなく、事実が私たちの政治的視点に従属するという主張なのだ」（マッキンタイアー 2020、30頁）

◆オルタナティブな世界を求めて

- ・トランプ大統領の就任式後、ホワイトハウス報道官スパイサーが「過去最大の人々が就任式をこの目で見るために集まった」と発言したことに対して批判が集まった。空撮写真を見れば、オバマ大統領の就任式に集まった人のほうが多いことは一目瞭然だった。これに対して、大統領顧問コンウェイは「それは**もう一つの事実**だった」と発言した。この発言は、ポスト・トゥルース問題の本質を示している。彼らにとって、それは「嘘」（非事実）ではなく「もう一つの事実」なのだ。
- ・トランプ支持者たちは、現実の世界のあり方に不信をもっており、それとは異なる世界がありうるはずだ、と信じている。現状の社会は何か間違っており、社会を主導するエスタブリッシュ層は腐敗している、これを根本的に覆す必要がある、と感じている。このような現状の社会への不満がポピュリズム現象を生み、それと連動する形でポスト

真实现象を生んでいるのではないか。彼／彼女らは事実を認識する能力を欠いているのではなく、現状の社会に不信を抱き、「別の世界」を希求している。

→陰謀論の流行もまたこのような社会心理的状況から生じているものではないか。

◆「置き去りにされた人々」の怒り——ポピュリズム研究の知見から

- ・ポスト真実の政治はポピュリズム問題とあわせて考える必要がある。
- ・水島治郎はポピュリズムの一因として、グローバル化や多様化やIT化が政策として押し進めたことによって、生活や仕事の面で不利益を蒙ったと感じている人々、「置き去りにされた **left behind**」と感じている人々の存在を挙げている (Ford/Goodwin2014; 水島 2016)。そうした人々からのエリート層への反撃がトランプ現象だった。
- ・ポスト真実の根幹にあるのは、現状の政治およびエスタブリッシュな言説 (いわゆるリベラル知識人など) への強い不満である (フクヤマ 2023)。口先ではもっともらしいことを言いながら、現実の格差や貧困、失業、街の荒廃、治安悪化などの問題を本気で解決しようとはせず、実際の庶民の生活に目を向けようとしないリベラル層への怒り。
- ・ホックシールド (2018) のいう「ディープストーリー」。

→「置き去りにされた人々」が、移民排斥や保護貿易を政策に掲げるトランプやファラージを強く支持するのもこのため。根っからの排外主義や差別主義よりも、グローバル資本主義に「置き去りにされた」ことの怒りがポピュリズムをもたらしている。これらの人々には、リベラル層が提示する「真実」や「正義」が疑わしく感じられている。

→リベラル系のメディアや知識人たちがどれだけファクトチェックを行い、「フェイクニュース」を信じている人々を「啓蒙」しようとしても効果がないのもそのため。根底にリベラル層やエリート層への不信感がある。

3. アーレント『全体主義の起源』から

- ・アーレントの「政治における嘘」論は、ポスト真実を論じるにあたってしばしば参照されている。2016年にトランプ大統領が選ばれた際に、アーレントの『全体主義の起源』とジョージ・オーウェルの『1984年』がベストセラー入りしたというニュースも。
- ・アーレントの「政治における嘘」や『全体主義の起源』は、現代のポスト真実を考えるにあたって示唆的な記述がたくさんある。全体主義とは、イデオロギーをテロルによって実現していく政治形態である、というのがアーレントの結論。

◆全体主義が用いる「一貫した嘘」

- ・全体主義はその運動において「嘘」を多用する。というよりも、「事実を軽視する」。全体主義の指導者は「事実への軽蔑」を特徴としている。彼らの力量は、イデオロギーに沿って現実世界とは異なる虚構の世界を作り上げることにかかっている。
- ・「嘘も百回言えば真実になる」というゲッベルスの言葉は有名。

「全体主義の指導者は普通の意味でのデマゴグではないし、マックス・ヴェーバーのいう「カリスマ的指導者」でも断じてない。彼らが抜きん出ている点は、事実と対立する完全な虚構の世界を築くに適切な要素を既成のイデオロギーから選び出す、過たない確かさなのである」(『全体主義の起原3』102頁)

「全体主義の指導者の手腕とは、経験可能な現実のなかから彼のフィクションにふさわしい要素を探し出し、それらを検証可能な経験から切り離された領域のなかに持ち込んで利用する技なのである」(103頁)

「全体主義の指導者は運動を権力の座につける原動力となった最初の嘘にあくまでも固執し、たとえその不条理さが完全に暴露されても決して放棄しないものだが、この執拗さは、世間を踊らせたあげくに自分の嘘の最後の犠牲者となるという、よく知られた嘘つきの心理とはほとんど無関係である」(103頁)

◆偶然性に満ちた現実から、首尾一貫したイデオロギーへの逃亡

- ・全体主義とは大衆運動であり、「故郷喪失」した大衆たちは全体主義が与えてくれる

「首尾一貫した」イデオロギーの世界を心地よく感じる。偶然性に満ち、複雑に入り組み、将来を見通すことができない現実社会に不安や不満を抱いている。

「大衆が認めようとしなないのは、あらゆる現実の一要素をなす偶然性である。…イデオロギーはあらかじめ法則を設定し、その法則の例証たりうる事実のみを事実として扱い、…すべての偶然の符号というものを排除してしまうのだから。このように現実から想像へ逃避し、事実から目をそむけて歴史の必然性を信じようとする態度は、あらゆる大衆プロパガンダにとっての前提条件なのである」(87頁)

「大衆は目に見える世界の現実を信ぜず、自分たちのコントロール可能な経験を頼りとせず、自分の五感を信用していない。それゆえに彼らにはある種の想像力が発達していて、いかにも宇宙的な意味を持つように見えるものなら何にでも動かされる。事実というものは大衆を説得する力を失ってしまったから、偽りの事実ですら彼らには何の印象も与えない。大衆を動かしうるのは、彼らを包み込んでくれると約束する、勝手に拵えあげた統一的体系の首尾一貫性だけである」(86頁)

「大衆がひたすら現実を逃れ矛盾のない虚構の世界を憑かれたように求めるのは、アナーキーな偶然が壊滅的な破局の形で支配するようになったこの世界にいたたまれなくなった彼らの故郷喪失のゆえである」(88頁)

- ・そもそも陰謀論とは「すべてが計画されており、偶然に起こることはないとし、世界を悪の陰謀者とその陰謀の無実の犠牲者に厳密に分け、陰謀は秘密裏に行われ、目的を達成した後もその存在を明らかにしないと主張している」(Butter & Knight 2020)。つまり、陰謀論は「偶然に起こることは何もない、見かけ通りのことは何もない、そしてすべてが繋がっている」と考える。偶然性と複雑性の排除が重要な特徴。

- ・かつてエーリッヒ・フロムはナチズムの到来は大衆の「自由からの逃走」によるものだと論じた。現代のポピュリズムをもたらしているのは「現実からの逃走」ではないか。事実と虚構の区別、真と偽の区別の軽視は、全体主義へと向かう危険な兆候。

「このプロパガンダは、どんなにありそうもないことでも軽々しく信じてしまう聴衆、たとえ騙されたと分かって、初めからみんな嘘だと心得ていたとけろりとしている聴衆を相手として想定し、それによって異常な成功を収めたのだった」(138頁)

「全体主義的統治の理想的な臣民は、筋金入りのナチでも筋金入りの共産主義者でもなく、事実と虚構の区別（つまり経験のアクチュアリティ）をも、真と偽の区別（つまり思考の基準）をも、もはや見失ってしまった人々なのだ」(345頁)

4. 陰謀論&ポスト真実といかに向き合うか

- ・ユージンスキーは、陰謀と陰謀論の区別は「認識論的権威」（すなわち、ある知識に関する専門的訓練を受けた人々）によって見定められるほかない、としている（ユージンスキー 2022、42頁）。しかし、そうした「専門家への知」への信頼が低下していることが、まさに今日の陰謀論&ポスト真実の普及を招いているのではなかったか。
- ・また、マッキンタイア『エビデンスを嫌う人たち』、ウェスト『陰謀論からの救出法』では、陰謀論者をこちらの世界へと引き戻すためには、相手の主張を否定せずに辛抱強く対話を続けることの重要性が説かれている。しかし陰謀論者に対して「共感・敬意・傾聴」を保ち続ける対話は、かなりストレスのかかるものだろうなとも思われる。
- ・陰謀論者の「信念」を否定する「事実」の提示によって、その「信念」を変えることはできない。相手の「信念」に抵触しない範囲で、別の「事実」を提示するのが効果的（ターリ・シャーロット『事実はなぜ人の意見を変えられないのか』第1章）。

◆ネガティブ・ケイパビリティの可能性

西田公昭

- 1 陰謀論は、自己閉塞感や苦しみに寄り添ってくる¹

「世界は実は不当にゆがめられている」「あなたの責任ではない」というメッセージを発することで、「つらい状況は自分のせいではない」と寄り添ってくれる。

- 2 自己肯定感や自尊心が満たされる

世界の秘密に「他の人は気付いていない」「自分だけが知っている」と自己陶酔する。

- 3 社会的な認知や肯定感が与えられたように感じる

自分のすごさを周囲に知ってもらいたい、良いことを周囲の人に教えて社会貢献したいといった欲望を満たしてくれる。身近な人に否定されると、ネット上でつながって集団化し、さらに自己陶酔感を強めていく。

¹ 「家族が陰謀論に「どう接したら…」集まった声」(NHK WEB) 2023年12月7日記事
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20231207/k10014279481000.html>

家族が陰謀論にハマったらどうすれば良いのか？

- ・異なる価値観の人として受け止め、相手を否定せず、しかし相手に押しつけをやめるよう求めるように接していく。まずは話を聞いて、リスペクトして、受け止める。フェイク情報があふれる時代に生きているのだから「お互い間違っているかも」という対等なポジションを取ることからスタートする必要がある²。
- ・社会の見方が異なる人と共生しようとする、また『いつでもこっちに戻ってきてね』という態度で接し続けることが、家族の断絶を防ぐために重要。
- ・ただし、そうした関係性を作って引き戻すには、多くの場合長い時間がかかる。
- ・さらに、陰謀論を信じ込んでしまわないためには、世の中のあいまいさや複雑さに慣れることも必要。

→ネガティブ・ケイパビリティ...答えのない事態に耐える力。事実や理由を性急に求めず、不確かさや不思議さ、懐疑の中にいられる能力

→「首尾一貫したイデオロギー」に逃げず、偶然性と複雑性に満ちたこの現実世界を受け入れる力。このような能力をいかにして育てていくべきか。

- ・^{ははきぎほうせい} 帯木蓬生「人間の脳には「分かつろう」とする性質があるため、ネガティブ・ケイパビリティをもつことは難しい。しかし、安易に「分かつろう」とする姿勢をやめ、ネガティブ・ケイパビリティを通して、発展的な深い理解をめざすことが重要となる」
- ・佐藤卓己『あいまいさに耐える：ネガティブ・リテラシーのすすめ』（2024）でも、ポスト真実やファスト政治への対抗策として同様のことが説かれている。

※辻隆太郎「陰謀論へのイントロダクション」（『現代思想』2021年5月号）

「偶然など存在しないという信念は、共通して見られる特徴である。彼らは世界を、偶然や無意味なもの存在しない、極めて理性的で合理的なものとして考えているように思われる。同時に彼らは、人間の意志が事象を統制できる程度に関して過大評価しているようだ。つまり、何事か起こったならば、そこには必ず何者かの計画が存在するのである。」（辻 2021、44 頁）

→陰謀論者は、世界を理性的で合理的なものとして見過ぎているのとも言える。むしろ「世界の無意味さ」にいかに耐えるか。偶然性と複雑性に満ちた世界を、「明確で単純な因果関係」で説明しようとするのが陰謀論。その魔力にいかにして抗うか。「単純な犯人探し」に逃げない精神的忍耐力をいかにして鍛えうるか。

² 「親が陰謀論を信じ込んでしまった…苦しむ子どもたち」（NHK みんなでプラス）2023年8月30日記事 <https://www.nhk.or.jp/minplus/0016/topic061.html>

参考文献

- ウェスト、ミック (2024) 『陰謀論からの救出法 大切な人が「ウサギ穴」にはまったら』、ナカイサヤカ訳、あけび書房。
- 佐藤卓己 (2024) 『あいまいさに耐える——ネガティブ・リテラシーのすすめ』岩波新書。
- シャーロット、ターリ (2019) 『事実はなぜ人の意見を変えられないのか——説得力と影響力の科学』上原直子 (訳)、白揚社。
- 辻隆太朗 (2021) 「陰謀論へのイントロダクション」、『現代思想』第49巻6号、青土社、42-58頁。
- 秦正樹 (2022) 『陰謀論——民主主義を揺るがすメカニズム』中公新書。
- 帯木蓬生 (2017) 『ネガティブ・ケイパビリティ——答えの出ない事態に耐える力』朝日選書。
- フクヤマ、フランシス (2023) 『リベラリズムへの不満』会田弘継 (訳)、新潮社。
- ホックシールド、A.R (2018) 『壁の向こうの住人たち——アメリカの右派を覆う怒りと嘆き』、布施由紀子 (訳)、岩波書店。
- マッキンタイア、リー (2020) 『ポスト・トゥルース』大橋完太郎・居村匠・大崎智史・西橋卓也 (訳)、人文書院。
- (2024) 『エビデンスを嫌う人たち: 科学否定論者は何を考え、どう説得できるのか?』、西尾義人訳、国書刊行会。
- 水島治郎 (2016) 『ポピュリズムとは何か』中公新書。
- 百木漠 (2021) 『嘘と政治——ポスト真実とアーレント思想』青土社。
- ユージンスキ、ジョゼフ・E (2022) 『陰謀論入門 ——誰が、なぜ信じるのか?』北村京子 (訳)、作品社。
- Butter, Michael & Knight, Peter (2020), “General Introduction”, *Routledge Handbook of Conspiracy Theories*, pp.1-8.
- d'Ancona, Matthew (2017) *Post-Truth: The New War on Truth and How to Fight Back*, Ebury Press.
- Ford, Robert / Goodwin, Matthew (2014) *Revolt on the Right: Explaining Support for the Radical Right in Britain*, Routledge.
- Harambam, Jaron / Grusauskaite, Kamile / Wildt, Lars de (2022) “Poly-truth, or the limits of pluralism: Popular debates on conspiracy theories in a post-truth era”, *Public Underst Sci.* 31(6): 784–798.
- Harry, G. West / Todd, Sanders (2003) *Transparency and Conspiracy: Ethnographies of Suspicion in the New World Order*, Duke University Press.
- Knight, Peter (2000) *Conspiracy Culture: From Kennedy to the X Files*, Routledge.
- Melley, Timothy (2000) *Empire of Conspiracy: The Culture of Paranoia in Postwar America*, Cornell University Press.